

「マタイ 徴税人」

2014年06月12日

マタイは徴税人でした。徴税は税金を取り立てる仕事ですから、正規の職業です。しかし、主イエスの時代は、徴税人は罪人として軽蔑された職業でした。当時、罪人と言われたのは「徴税人、遊女、罪人（重い病気を負った人）」の三種類の人々でした。遊女は体を売る仕事ですから、罪人と烙印されました。重い病を負った人は、罪のゆえに神から罰せられた人と理解されました。病を神からの罰とされることは残酷ですが、難病者は罪人とされました。徴税人は、ユダヤ人から税金を取り立て、ローマに送る仕事をする人です。ローマ帝国は、豪華な貴族生活と膨大な軍隊を維持するために莫大なお金が必要でした。支配下に置いた国々から税金を過酷に取り立てたのです。それを、ローマ人がすると反感を買いますから、ユダヤ人を徴税人として雇い、彼らに徴税させたのです。ですから、ユダヤ人からすると、自国民から税金を取り立て、ローマに送る徴税人は、国を裏切る「売国奴」だったのです。彼らは徹底的に嫌われました。罪人とされた人々は、非人間的に扱われ、イスラエルの共同体から排除されました。

マタイは、その徴税人でした。彼がなぜ徴税人になったのか分かりません。徴税人として生きていたマタイは、共同体から排除され、人との交わりを拒絶されていました。いじめで「無視」という形があります。無視され続けると、孤独地獄の中で、人間の心を失い、魂が死んでいきます。マタイは死人のようになって、現在のイメージで言うなら高速道路の料金徴収所のような所に座って、道行く人から徴税していたのです。彼は、主イエスに群がって、大騒ぎしながら移動する群れに対しても、何の興味も示さない、茫然自失の状態で、ただ座っていました。主イエスは、排除された孤独が生み出した魂の死を見抜いていました。マタイの前に立ち、一言「わたしに従いなさい」と声をかけました。彼は、自分を人間として認め「従え」と言ってくださる主イエスの呼びかけに、我を取り戻したのです。こういう経験は誰もが味わっているでしょう。行き詰まり、途方に暮れている時、たった一言の言葉に触れて立ち上がる契機を得た。マタイは、主イエスの呼びかけに、人間復帰の声を聴いたのです。彼は、即座に収税所から立ち上がり、主イエスに従いました。そして、徴税人や罪人（難病者）を招き、盛大な宴会を開きました。人間として生きられる喜びが、そのように突き動かしたのです。

主イエスに従うようになってからのマタイの姿は、聖書に全く記されていません。けれども、嬉しい伝説があります。マタイ福音書とルカ福音書には、共通に用いた「主イエスの語録」があったことが分かっています。それを「語録資料（Q資料）」と言います。このQ資料をマタイが書いたのではないかと想像する人がいます。ガリラヤの漁師であったペトロやヨハネなどは、文字を自由に書けなかったのに対し、マタイは徴税人ですから、文字が書けた。主イエスに従い、十字架と復活を経験し、福音書の基礎になるQ資料を書いた。もし、これが本当であったなら、魂が死んで廃人のようになっていたマタイは、後世の福音伝道に大きな貢献をした。無為から有為に変えられた人になります。そして、形や意味は違っても、主イエスに従うことは、無為から有為に変えられて生きることであると思います。自分の人生を嘆かない。有意義へと高めてくださることを信じて、主イエスに従っていきたくないと励まされます。